

Making of 『いもむしのうんち』

一冊の絵本ができるまで

自然のおもしろさは奥が深い。職業柄、我が社の調査チームは図鑑や専門書にはない珍談奇談に通じているそれらを何らかの形で表現するのが、私たち企画室の仕事のひとつである。今回、絵本を作ったのもその一端なのだが、すでに何百とある既刊に新しく加えるだけの価値があるかどうかずっと自問してきた。できてみれば、あまたの中の一つだけだけれど、『いもむしのうんち』はそれに値すると今も思う。生きものの生懸命にふれたおもしろさを、つたないながらも率直に表現できたと思うからだ。



『いもむしのうんち』 / 監修・林長閑
構成・E.E.net（地域環境計画企画画室）
発行・アリス館

育てる

'95年の4月上旬、絵本のあらすじが決まり、主役のアオスジアゲハを飼い始めた。さなぎを採ってきて羽化させると同時に、知人からもらい受けた卵をかえして、成長過程を追った。

幼虫の食草はクスノキなどクスノキ科の葉である。その葉を摘んできて冷蔵庫に常備し、とりかえるのが朝の日課になった。自然状態なら常温の葉を食べているのだから、つめたい葉を食べて万一おなかをこわしてはいけないと、手のひらで軽く暖めてから与えた。音をたてて葉を食べ続ける幼虫は、ひたむきに命を全うしようとするすこやかな力に満ちていた。

1 令幼虫のうんちは、けしつぶよりも小さい。それが成長につれ、体の大きさにも比例して劇的に大きくなる。量もどんどん増える。2 令、3

令からオシロイバナの種子そっくりな5 令幼虫のうんちまで、毎日採集し保存した。全部ずらりと並べてみると、実に壮観だった(図1)。

待つ

生きものがこちらの思いどおりに

動いてくれるわけもなく、撮影はひたすら「待つ」作業だった。

うんちをする瞬間を撮りたくて、カメラをセットしてずっとねばっていたのに、ほんのちょっと目を離したすきにぼろん、とやっている。葉を食べるところを撮ろうと、しばらくおなかをすかさせておいてセットしてもな

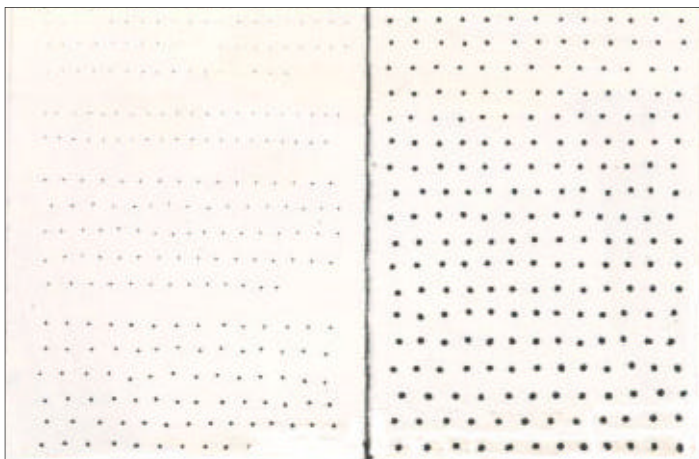


図1 1 令幼虫から5 令幼虫までのうんち。右ページは全部5 令幼虫のしたもの。

図2
幼虫とうんち。このしぐさは
実にラブリー。

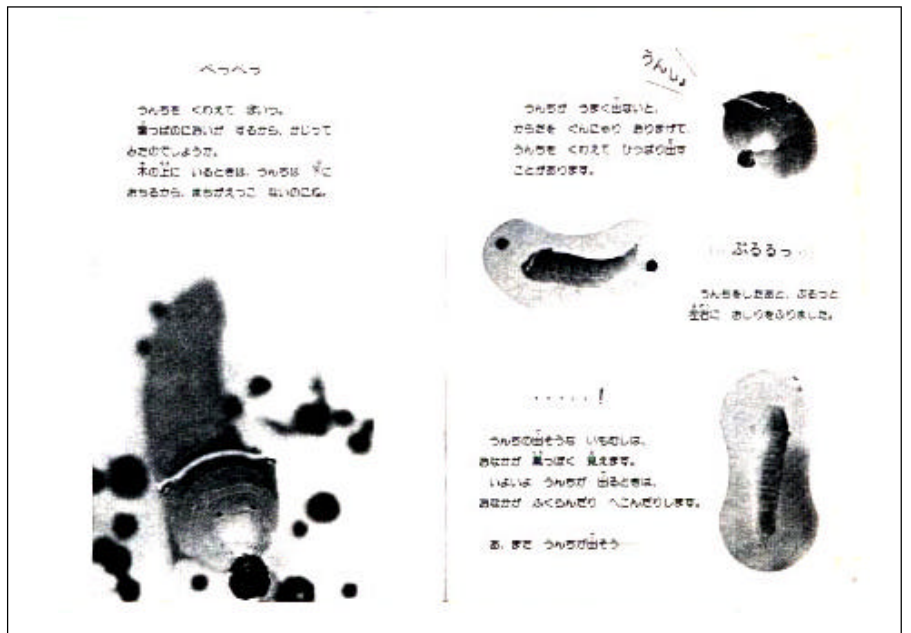
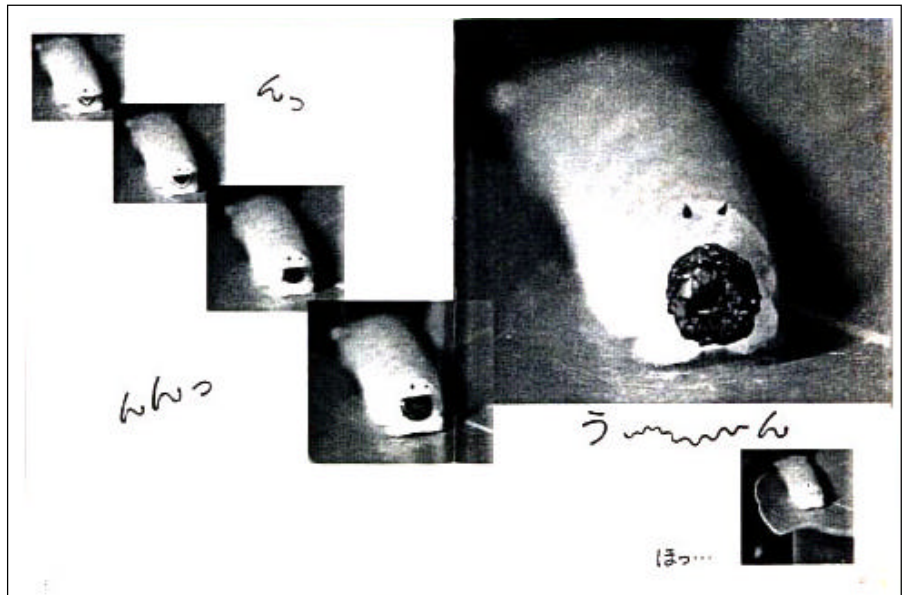


図3
「くるぞくるぞ、きたー!!」
こちらもスッキリしてしまう。



ぜか食べ始めない。また羽化するの
は2,3日先だろうと思って出社し
たら、飼育水槽の中で成虫がばたば
たしていたこともあった。

見つめる

観察を続けるうち、図鑑に載って
いないのはもちろん、飼育した経験
のある人でも知らなかった発見がた
くさんあった。

うんちをした直後におしりをぶ
るっと振ったり、鼻先にあるうんち
をくわえてポイツと振り飛ばしたり。
うんちがうまく出ないと、体を
丸め、くわえて引っ張り出したりも
した(図2)。

そしてなんととっても圧巻はうん
ちをする瞬間で、うす緑の腹がやや
黒っぽくなったと思うと、思いきり
よくぼろり、とうんちを出す。これ
は何度見てもおもしろかった(図
3)。

また、幼虫は口から粘着質の細い
糸をはきつけながら歩く。その糸で
足場を保っているのだが、それにう
んちがくっついて、おしりにうんち
をぶらさげて歩いていることもあ
った。初めて見たときは笑った。

つたえる

素材はこんなにおもしろいのだ。
あとは「へえー、うわあ、こりゃす
ごい」という私たちの驚きや感心
を、写真と文章でどう表現するか、
だった。

私たちは、読者に「いい勉強に
なった」ではなく「ええっ、ホント?
見てみたい!」と言われる絵本を作
りたかった。そのために繰り返し編
集会議を開き、内容は五転六転し、
撮影担当は七転八倒した。

おかげさまで新聞などの書評にも
取り上げられ、なかなか評判が良い
ようだ。虫ギライの人にも「これは
だいじょうぶ」と嬉しい感想を聞い
た。苦労は記憶の彼方にかすみ、第
2弾の構想を練る毎日である。

(本社企画室・南谷佳代)